

静岡大学附属図書館での一次資料『内蒙古日報』(1952-1966)の調査

朝魯蒙 文化動態学分野・専門 博士前期課程2年

本稿は、2022年度名古屋大学人文学研究科フィールドワーク調査による助成を受けて行われた「静岡大学附属図書館での一次資料『内蒙古日報』(1952-1966)の調査」の成果報告書である。今回の調査では、静岡大学附属図書館に保管されている中国・内モンゴル自治区の党政機関紙である『内蒙古日報』(1952-1966)の資料を調査した。本調査に基づき、修論では年代の区切りを考慮して、1965年までの調査結果を分析した。

研究の背景 新中国の成立後、内モンゴル自治政府は正式に内モンゴル自治区人民政府となり、社会主義改造から始まる体制転換を経験した。さらに、内モンゴル自治区の「集団化」、すなわち社会主義改造は1952年の「互助合作運動」から始まり、互助組、合作社、高級合作社の3段階を経て、1958年末ごろから、「人民公社」が数ヶ月という短期間のうちに組織された。「人民公社」は1958年から1984年まで、制度として残り続けていた。内モンゴルは社会主義への転換において、遊牧から「集団化」、そして「私有化」を経験した。

研究の目的 党政機関紙である『内蒙古日報』(1952-1965)においてモンゴル族女性を取り上げる際、少数民族と女性を特に強調する傾向がうかがえる。このような問題点を踏まえ、本稿は、『内蒙古日報』がどのようなモンゴル族女性を選出しているのか検討することによって、時代背景の考察を行い、前述の内モンゴル自治区の社会主義経験を踏まえたうえで、党政機関紙である『内蒙古日報』(1952-1965)を基に、内モンゴルにおける集団化初期にモンゴル族女性がどのようなイメージを与えられ、いかに社会主義中国で「理想」とされてきたのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法 研究方法としては、第一資料の記事に基づく内容分析が中心となる。本稿は内モンゴル自治区が経験した社会主義改造時期、社会主義集団化初期を背景として、『内蒙古日報』の1952年から1965年までの14年間の新聞記事を第一研究資料とする。

内モンゴル自治区民主改革以降、1952年から1965年の社会主義的改造、集団化初期を互助合作時期と人民公社時期を区切りとする。静岡大学附属図書館に資料調査に行き、『内蒙古日報』からモンゴル族の女性を主体に報道された記事をピックアップした。1952年から1957年の間に、モンゴル族の女性を主体に報道された記事は212件、1958年から1965年の記事は252件ある。ピックアップした記事を分類した上で、内容分析をした。

考察の結果 集団化時期には「私的領域」が「公的領域」に埋め込まれており、「公私混交」の社会構造が構成され、個人-集団-国家という同心円構造では「家族」は曖昧化されていた¹⁾。このような社会構造において「労働婦人」の構築を重要な政治目標の一つとし、女性の労働参与を促すことは中国共産党と婦人連合会の政治任務の重点であり、このような国家イデオロギーによる価値志向の下で、国家が『日報』を通じて、モンゴル族女性の中に「牧業労働」に参加する「牧民婦人」という集団的アイデンティティを構築していたことを明らかにした。この時期に「牧民婦人」に対して示した新たな要求は「万能の女性」であり、伝統社会の男女役割分業と制度は瓦解された。『日報』で登場する女性労働模範は、国家が構築し、期待する「理想」の模範であり、積極分子は党政策と国家政策の忠実な実践者であった。当時の『日報』に掲載された女性像は、「産む性」と「働き手」という二つの理想的な役割をもつ女性像を大衆に伝えようとしたと考える。

1) 宋少鵬、高夏薇 (2022) 「境況性知識、内在歴史的視域：回看中国百年婦女運動的歴史与経験」『開放時代』2022年第6期、32-53頁。

感想 今回の調査において困難だった点は、1950年代に発行された新聞紙であるため、電子版がなく、大量の資料を閲覧した上で、整理やスキャンなどの作業を行う必要があった。閲覧中に Excel などのソフトウェアでデータ化整理を行うことで、後続の閲覧や論文執筆に役に立った。また、『内蒙古日報』は特別資料館に収蔵されているため、事前に図書館職員から閲覧資格を取得し、利用時間と注意事項を確認する必要があった。